

少しづつ作られてゆく花嫁のわたしの前を足早の母

佐藤モニカ

結婚式当日の花嫁の作。式にふさわしいよう係の人によつて化粧され、服を着せられ、髪型を作られて行く。

私はこの作者の那覇での披露宴に参席した。沖縄の伝統的な風習したがつての花嫁姿だったから、まさに「作られてゆく」という感じだったのだろうと思う。下句、花嫁の母の、なんとはなしに落ち着かない仕草を表現してリアリティがある。

サグレスの岬に立てば古の航海人の夢が行き交う

中根猛

ボルトガルのサグレス岬は、ユーラシアの西南端の岬で、エンリケ航海王子ゆかりの地でもある。十五、六世纪の大航海時代の「航海人」たちの、あの夢の壮大さと海洋へ乗りだそうとする情熱の強さは特別なものだった。「夢」という使い古された語に、新たなきらめきを与えられたかどうかが勝負。

薄雲に白くけぶれる夜の月

きょう本当を伝えられたか

加古陽

帰宅途中だろう。職場からの帰り道と読み、職場・仕事の歌と読むのがいい。作者が新聞人であることを知れば、その職業ならではの独特的の意味が立ち上がつてくる。印象的な下句だ。

少しだけ星が見えた夜少しだけ見えない星のこと考える

蒼井杏

二つの「少しだけ」は同じ意味ではない。同じフレーズだが、意味はずれています。前者は星の数が少しだけの意味、後者は考える時間が少しだけの意味である。口語歌だから可能だつた独特的のユーモアがうれしい。

樺桜の仄くれなゐの花の色一輪なれば鶴よ触るな

北澤道子

マルメロは実が話題になることが多いが、ここは花。マルメロの花は五月ごろ、淡いピンクの花を数輪まとまって咲かせるが、ここは一輪。花の存在感をしていねいにうたつて印象的な一首に仕上げた。

花はまたひととせののち咲くべきに今聴かむかなこ

の嘶家を

藤島秀憲

年配の嘶家なのだろうか。あるいは今が旬の嘶家なのか。「本毎に花は咲けども何とかも愛し妹がまた咲き出未ぬ」という、中大兄皇子になりかわつての野中川原史満の作を思い出させて何か切ない一首である。「本毎に

……」は『日本書紀』所収の歌。

わが腕に抱き締めてゐる子を肉を骨を命を心を愛す

金有美

子への愛を、率直に、強く、ストレートに表現していく、私は好感を持つ。比喩や雰囲気的表現、婉曲表現など、非直接表現が幅をきかせる現代短歌界では目立つ。かつて、娘への愛情をストレートに表現した五島美代子の歌などが思い出される。

妻と呼ばずそちらと呼びて一世過ぐそちら、こちら、

短歌の現在

No.400 今月の15首を読む

佐佐木幸綱